古代文字資料館発行『KOTONOHA』第 103 号（2011 年 6 月）

長田夏樹氏の契丹語ノートなど
—契丹原字出度表—

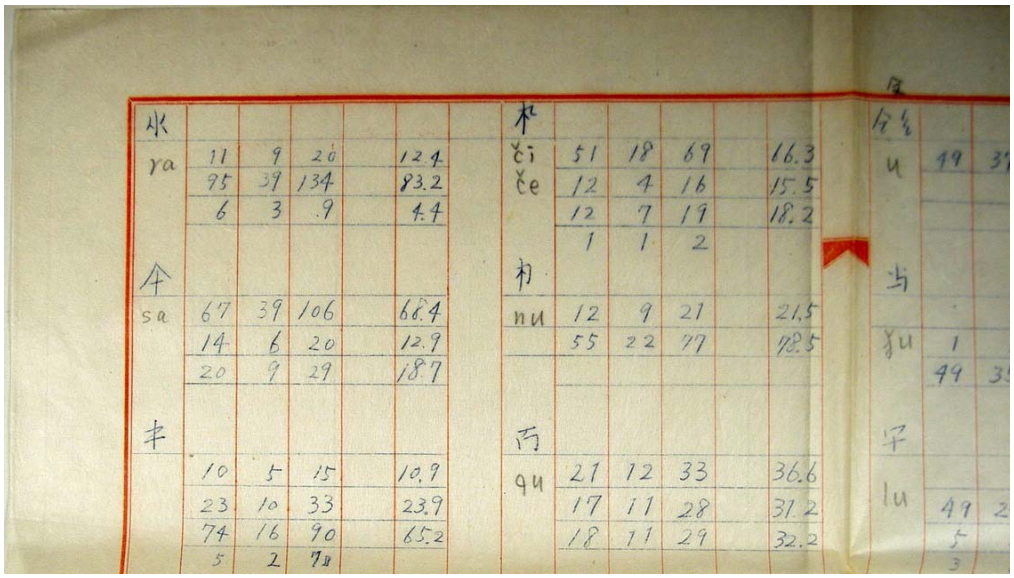
吉池孝一

1. はじめに

平成 23 年 1 月末、故長田夏樹先生の契丹語女真語研究に係わるノートやカードなどをお寄せいただいた。まずもって貴重な遺品の使用をお許しくださった長田家の皆様に御礼申しあげたい。長田夏樹氏はこの方面における研究の先駆者の一人であり、ノート類は契丹文字と女真文字の解読の経緯を明らかにするうえで得がたいものとなるはずである。斯界共通の資料とすべく順次紹介させていただく所存である。さて、ここに大学ノート一冊がある。表紙には“　契丹語ノート　　Ⅴ大金皇帝經略郎君行記　Ⅳ興宗仁懿皇后哀冊 ”とあり、中には契丹小字と漢語訳と小字の音価が記されている。さらにノートの初頭と末尾には、書き込みのある背紙や図表など、大小さまざまな紙片が挟み込まれている。これらを順次紹介する。

2. 契丹原字出度表

「契丹語ノート」と書かれた大学ノートに罫紙が三枚挟み込まれていた。中央に京都大學文學部と赤字で印刷された縦 26 行の B4 大の罫紙である。横罫線および契丹原字とその出度数が青インクで記されている。青インクの部分はカーボン紙による写しのようにみえる。そして、それぞれの契丹原字の下には鉛筆で音価が書き込まれている。鉛筆の筆跡は長田夏樹氏のものと思われる。表に題はない。いまこれを「契丹原字出度表」と名づける。



水				
ra	11	9	20	12.4
	95	39	134	83.2
	6	3	9	4.4
今				
sa	67	39	106	68.4
	14	6	20	12.9
	20	9	29	18.7
丰				
	10	5	15	10.9
	23	10	33	23.9
	74	16	90	65.2
	5	2	7	

本				
či	51	18	69	16.3
če	12	4	16	15.5
	12	7	19	18.2
	1	1	2	
扌				
nu	12	9	21	21.5
	55	22	77	18.5
丙				
qu	21	12	33	36.6
	17	11	28	31.2
	18	11	29	32.2

今		
u	49	3
与		
ǰu	1	
	49	3
平		
lu	49	2
	5	
	3	

図表の体裁を一例によって示すと次のとおりである。{ }で契丹原字を括り、清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼 1985（以下、清格爾泰等 1985 と略称する）中の文字番号で原字を示す。{　}の前の通し番号は仮に付したもので元の表にはない。なお、鉛筆で書き込まれた音価は通常一種であるが、この例のように二種書かれている場合もあるし、何も書かれていない場合もある。

7.{162}

či	51	18	69	66.3
če	12	4	16	15.5
	12	7	19	18.2
	1	1	2	

ここに示された数字につき説明はないが、縦左端の「51　12　12　1」は当該原字{162}の道宗哀冊における詞頭、詞中、詞尾、単独の出度数、次の「18　4　7　1」は宣懿皇后哀冊における詞頭、詞中、詞尾、単独の出度数、次の「69　16　19　2」は両者の合計である。それは宣懿皇后哀冊の部分が長田 1951 で示された宣懿皇后哀冊の詞頭、詞中、詞尾、単独の出度数とほぼ一致することからわかる。左端の数字が道宗哀冊のものであることについては原字の数を数えて確認した。したがって、右端の「66.3　15.5　18.2」は、{162}の道宗哀冊および宣懿皇后哀冊における、詞頭、詞中、詞尾の出現比率ということになる。以下表の内容を翻字する。通し番号の頭に＊印のあるものについては末尾に注を付した。

罫紙一枚目左葉

1.{261}

γa	11	9	20	12.4
	95	39	134	83.2
	6	3	9	4.4

2.{244}

sa	67	39	106	68.4
	14	6	20	12.9
	20	9	29	18.7

3.{122}

	10	5	15	10.9
	23	10	33	23.9
	74	16	90	65.2
	5	2	7	

4.{189}

ya	20	8	28	22.2
	58	27	85	67.4
	7	6	13	10.4

5.{334}

(qa)	32	19	51	40.8
γu	25	9	34	27.2
	28	12	40	32.0

6. {131}

da	9	8	17	15.4
	37	18	55	49.5
	23	16	39	35.1

7. {162}

či	51	18	69	66.3
če	12	4	16	15.5
	12	7	19	18.2
	1	1	2	

＊8. {140}

nu	12	9	21	21.5
	55	22	77	78.5
	-	-	-	

9. {20}

qu	21	12	33	36.6
	17	11	28	31.2
	18	11	29	32.2

10. {97}

	5	2	7	8.0
	22	11	33	37.0
	34	15	49	55.0

＊11. {112}

la	-	-	-	
	68	21	89	100
	-	-	-	

12. {51}

ru	-	-	-	
	64	24	88	100
	-	-	-	

罫紙一枚目右葉

13. {247}

u	49	37	86	100
	-	-	-	
	-	-	-	

14. {361}

ǰu	-	-	-	
	1	1	2	2.4
	49	35	84	97.6

15. {366}

lu	-	-	-	
	49	24	73	91.2
	5	2	7	8.8
	3	1	4	

16. {341}

dur	-	-	-	
	1	-	1	1.2
	63	20	83	98.8

17. {311}

tu	16	6	22	12.2
	35	13	48	58.5
	4	8	12	29.3

18. {144}

ni	5	4	9	11.5
	9	6	15	18.9
	35	31	55	69.6

19. {151}

ba	21	12	33	42.8
	8	8	16	20.9
	21	7	28	36.3

20. {222}

n	10	3	13	17.5
	3	2	5	6.9
	35	21	56	75.6

21. {339}

su	2	4	6	9.0
	11	3	14	20.9
	31	16	47	70.1

＊22. {152}

dun	1	2	3	5.1
	7	2	9	15.3
	26	21	47	79.6

＊23. {76}

	13	6	19	33.3
	9	5	14	24.6
	17	7	24	42.1
	2	1	3	

＊24. {340}

e	37	20	57	100
	-	-	-	
	-	-	-	

罫紙二枚目左葉

25. {28}

a	32	25	57	100
	-	-	-	
	-	-	-	

26. {372}

	3	-	3	5.3
	33	21	54	94.7
	-	-	-	

27. {295}

	34	16	50	100
	-	-	-	
	-	-	-	

28. {98}

	7	1	8	16.3
	21	11	32	65.3
	8	1	9	

29. {251}

	25	15	40	83.3
	2		2	4.2
	2	4	6	12.5

＊30. {109}

	1		1	2.2
	9	6	15	31.2
	16	16	32	66.6

31. {262}

	4	1	5	10.9
	14	9	23	50.0
	11	7	18	39.1
	2	3	5	

32. {186}

	6	1	7	15.3
	17	11	28	60.8
	9	2	11	23.9

33. {90}

gi	-	-	-	
	26	17	43	100
	-	-	-	

＊34. {133}

	27	15	42	100
	-	-	-	
	-	-	-	

罫紙二枚目右葉

＊35. {254}

de	5	-	5	12.0
	17	8	25	59.5
	7	5	12	28.5

＊36. {80}

	-	2	2	4.9
	11	7	18	43.9
	14	7	21	51.2

37. {235}

	2	-	2	5.
	21	13	34	85.
	4	-	4	10.
	1			

＊38. {356}

'ad	-	-	-	
	9	3	12	33.3
	19	5	24	66.6

39. {84}

	3	-	3	8.9
	16	4	20	58.8
	5	6	11	32.3
		1	1	

40. {290}

	2	-	2	6.1
	12	19	31	93.9
	-	-	-	

41. {224}

bu	12	5	17	51.5
	9	7	16	48.5
	-	-	-	

＊42. {21}

	19	12	31	100
	-	-	-	
		3	3	

＊43.{66}

mu	3	2	5	16.6
	6	8	14	46.6
	9	2	11	

＊44.{161}

	13	4	17	58.6
	7	5	12	41.4
	-	-	-	

罫紙三枚目左葉

45.{174}

	4	2	6	20.7
	5	8	13	44.8
	6	4	10	

＊46.{236}

ye	3	1	4	14.3
	13	3	16	57.1
	6	2	8	28.6

47.{273}

tan	-	-	-	
	2		2	7.2
	16	10	26	92.8

＊48.{11}

	1	-	1	3.5
	3	4	7	
	12	8	20	71.4

＊49.{205}

ud	-	-	-	
	1	-	1	3.7
	13	13	26	96.3

＊50.{196}

ri	-	-	-	
	16	10	26	96.3
	1	-	1	3.7

51.{19}

	1	2	3	11.1
	13	8	21	77.7
	2	1	3	11.1
	2	1	3	

＊52.{283}

	15	10	25	100
	-	-	-	
	-	-	-	

＊53.{41}

	11	7	18	72
	4	3	7	28
	-	-	-	

54.{92}

	6	5	11	44
	3	1	4	16
	6	4	10	40
	2			

罫紙三枚目右葉　　－　－　－

55.{335}　　14　3　17　77.2

4　6　10　43.4　　3　2　5　22.8

2　2　4　17.5

7　2　9　39.1　　＊59.{67'}

1　1　　16　5　21　100

－　－　－

＊56.{257}　　－　－　－

3　－　3　13.1

4　5　9　39.1　　＊60.{33}

7　4　11　47.8　　ul　－　－　－

1　1　2　　13　2　15　71.4

－　6　6　28.6

＊57.{288}

ten　4　2　6　26.1　　＊61.{289}

1　1　2　　6　1　7　33.3

13　2　15　65.2　　2　3　5　23.9

3　6　9　42.8

＊58.{327}

注

・8.{140}。本表では詞頭の欄に「12　9　21　21.5」とあり、詞中の欄に「55　22 77　78.5」とあるが、詞中「12　9　21　21.5」、詞尾「55　22 77　78.5」とするのが正しい。

・11.{112}。長田 1951 は宣懿皇后哀冊の出度数を求めたものであるが{112}を行書体、{349}を楷書体とし両者を同一字として出度数をだす。その点は本表も同様である。清格爾泰等 1985 は{112}と{349}を同音あるいは近似音とする(139 頁 13 行)。なお、本表が詞中とする宣懿皇后哀冊の出度数 21 を、長田 1951 は詞尾とするがこれは誤記であり、長田 2001 に再録された版では詞中に訂正されている。

・22.{152}。長田 1951 および本表は{152}と{153}を同一字として出度数をだす。清格爾泰等 1985 も{152}と{153}を同一字とする(155 頁 1-2 行)。

・23.{76}。長田 1951 とその改定版である長田 2001 は{76}を行書体、{80}を楷書体とし両者を同一字として出度数をだすが、本表は両者を区別する。後出の 36.{80}を参照されたい。

・24.{340}。本表は道宗哀冊および宣懿皇后哀冊の詞中を共にゼロとするが、道宗哀冊 19

行第 35 詞目に詞中の例があり、宣懿皇后哀冊 23 行第 2 語目にも詞中の例がある。なお長田 1951 は宣懿皇后哀冊の詞中をゼロ、詞尾 1 とするがこれは誤記であり、長田 2001 に再録された版では、詞中 1、詞尾ゼロに訂正されている。

・30.{109}。長田 1951 とその改定版である長田 2001 および本表は、{109}を行書体、{348}を楷書体とし両者を同一字として出度数をだす。清格爾泰等 1985 も{109}は{348}の行書体であろうとする(76 頁 5-6 行)。

・34.{133}。本表の詞中、詞尾ともにゼロであるが、拓本によると道宗哀冊の詞尾に 2(33 行第 32 詞目と 36 行第 23 詞目。もっとも後者については拓本による限り明瞭でない)、 宣懿皇后哀冊の詞中に 1(11 行第 14 詞目)が認められる。後者については長田 1951 の出度表にもある。

・35.{254}。長田 1951 にない。長田 1951 は宣懿皇后哀冊の出度数を求めたものであるが出度数の合計が 10 未満のものは収録しない。本表をみると出度数は 13 である。長田 1951 に未収録の理由は不明。

・36.{80}。長田 195 とその改訂版である長田 12001 は 23.{76}を行書体、36.{80}を楷書体とし両者を同一字として出度数をだす。本表では両者を区別する。前出の 23.{76}を参照されたい。

・38.{356}。長田 1951 にない。長田 1951 は宣懿皇后哀冊の出度数を求めたものであるが出度数の合計が 10 未満のものは収録しないためである。なお、本表の詞末の数字は、{356}と{357}の合計となっている。{356}と{357}は類似した原字であり、{356}は詞中と詞尾で使用され、{357}は詞尾にのみ使用される。両者の相違がどこにあるか問題となる。清格爾泰等 1985 は漢語音との対応により{357}の音価を uŋ とする。{357}の詞中での使用例がないとするならば、あるいは漢語音を表記するための専用字であるかもしれない。

・42.{21}。本表では詞尾の欄に「3」とあるが、単独「3」とするのが正しい。

・43.{66}。長田 1951 および本表は、{66}を楷書体、{67}を行書体とし同一文字として出土数をだす。しかしながら、{66}は詞頭に使用され、{67}は詞中と詞尾に使用されることからみて、これを書体の相違とするのは困難であろう。

なお、清格爾泰等 1985 は{67}は詞頭にも立つとする。もっとも、詞頭の{67}と詞中詞尾の{67}はやや字形を異にする。そこで今、詞頭の{67}を{67'}と表記することにすると、これらの原字は次のようになる。

詞頭	詞中	詞尾
{66}		
{67'}	{67}	{67}

清格爾泰等 1985 は詞頭{67'}・詞中{67}・詞尾{67}を同一字とし、{66}とは区別する。長田

1951 および本表は詞頭{66}・詞中{67}・詞尾{67}を同一字とし、{67'}とは区別する。

・44.{161}。長田 1951 にない。長田 1951 は宣懿皇后哀冊の出度数を求めたものであるが出度数の合計が 10 未満のものは収録しないためである。

・46.{236}。長田 1951 にない。長田 1951 は宣懿皇后哀冊の出度数を求めたものであるが出度数の合計が 10 未満のものは収録しないためである。

・48.{11}。長田 1951 にない。長田 1951 は宣懿皇后哀冊の出度数を求めたものであるが出度数の合計が 10 未満のものは収録しないためである。本表で 12 を数えるのは、後に草書体 2 および欠落のある字 1 を{11}と認めて追加したためであろう。

・49.{205}。長田 1951 の 56 番の字形と本表の字形を、外形の印象のみによって{205}と同定するのは困難であるが、出度数によって確かに{205}であると知ることができる。

・50.{196}。長田 1951 は宣懿皇后哀冊の出度数を求めたものであるが詞中 9、詞尾 1 とする。宣懿皇后哀冊については本表のように詞中 10、詞尾 0 とするのが正しい。

・52.{283}。長田 1951 にない。長田 1951 は宣懿皇后哀冊の出度数を求めたものであるが出度数の合計が 10 未満のものは収録しない。本表をみると出度数は 10 である。長田 1951 に未収録の理由は不明。

・53.{41}。本表では、詞頭の欄に「11　7　18　72」とあり、詞中の欄に「4　3　7　28」とあるが、詞中「11　7　18　72」、詞尾「4　3　7　28」とするのが正しい。

・56.{257}。長田 1951 にない。長田 1951 は宣懿皇后哀冊の出度数を求めたものであるが出度数の合計が 10 未満のものは収録しないためである。本表で 10 を数えるのは、後に単独 1 を追加したためであろう。ただし宣懿皇后哀冊の単独 1(11 行第 22 詞目)は{268}である。道宗哀冊の単独 1(10 行第 30 詞目)も{268}である。{257}と{268}の字形は類似しているが同一字である保証はない。

・57.{288}。長田 1951 にない。長田 1951 は宣懿皇后哀冊の出度数を求めたものであるが出度数の合計が 10 未満のものは収録しないためである。

・58.{327}。長田 1951 にない。長田 1951 は宣懿皇后哀冊の出度数を求めたものであるが出度数の合計が 10 未満のものは収録しないためである。

・59.{67'}。これは、先の 43.{66}の補注おいて、{67}と区別して{67'}としたものである。清格爾泰等 1985 は詞頭、詞中、詞尾のすべての位置に立つ{67}という原字を想定する。しかしながら詞頭と、詞中・詞尾で字形をやや異にする。詞中と詞尾に比して、詞頭では最終画が右から左下に鋭く長く突き出る。このような詞頭の原字につき、長田 1951 および本表は、詞中・詞尾とは異なる原字と想定する。そこで先の 43.{66}の注において、詞頭を{67'}で表記し、詞中・詞尾{67}として両者を区別したのである。本表の 59 番は詞頭{67'}の出土数をまとめたものである。なおこの原字は長田 1951 にはない。

・60.{33}。長田 1951 にない。長田 1951 は宣懿皇后哀冊の出度数を求めたものであるが出度数の合計が 10 未満のものは収録しないためである。
・61.{289}。長田 1951 にない。長田 1951 は宣懿皇后哀冊の出度数を求めたものであるが出度数の合計が 10 未満のものは収録しない。本表をみると出度数は 10 である。長田 1951 に未収録の理由は不明。

3.おわりに

契丹原字出度表に作成時期は記されていないが、1952 年の秋頃のものとみて大過はないであろう。大過ないとは次のような事情を見ての判断である。すなわち、田村實造・小林行雄著『慶陵』(京都大學文學部 座右寶刊行会。上巻は 1953 年 3 月刊行)の末尾に「接尾語として用いられた契丹文字の類別表」(以下「接尾語表」と呼ぶ)が折り込まれている。この表の作成につき、長田礼子 2011「長田夏樹年譜」には次のようにある。

1952(昭和 27)年

10 月　京大の田村実造氏と小林行雄氏に呼ばれ、天理大学の山崎忠氏と一緒に慶陵出土の契丹文字を記載した表を作成する。(348 頁)

長田夏樹 1994 は『慶陵』の著者の一人である小林行雄氏の追悼録に寄せた一文であるが、それによると「その小林さんと対面の栄に浴したのは、一九五二年の秋であった。田村実造教授に呼ばれて訪れた京都大学の東洋史研究室に小林さんもおられたのである。・・・【省略】・・・ほどなく、山崎バクシと私は京都に呼ばれて、百万遍にある寺を宿舎にして、研究合宿と言うことにあいなった。」とある。この作業の成果が『慶陵』「第四節　契丹文字の哀冊」の記述と「接尾語表」として結実したわけであり、「接尾語表」を作製するにあたって契丹原字出度表に類するものを利用したことについては『慶陵』に次のようにある。

われわれは『元朝祕史』および甲種本『韃靼館譯語』の各音節頻度表と、興宗・仁懿皇后・道宗・宣懿皇后の四哀冊文にみえる契丹原字の頻度表とを比較對照するとともに、別表にかかげた契丹語接尾語と、中世蒙古語の接尾語を照合して、すでに數十個の契丹原字の音價を推定することができた。(265 頁)

この記述によると、興宗・仁懿皇后・道宗・宣懿皇后の四哀冊文の“頻度表”が作られたようであるが、いま我々が確認することができるのは道宗と宣懿皇后の出度数を記したもの、すなわち今回紹介した契丹原字出度表である。またこの契丹原字出度表は「京都大學文學部」と赤字で印刷された罫紙を利用したものであり、京都大学の田村實造氏と小林行雄氏に呼ばれて京都で研究合宿をした折に使用したものとみて矛盾はない。もっとも、契丹原字出度表に記された原字の音価と『慶陵』「接尾語表」の音価とは異なる部分がある。

短期間に推定音価の変更がなされ『慶陵』「接尾語表」の音価となって公表されたようであるが、この点については稿を改めて検討する。

〈参考文献(発行年順)〉

長田夏樹 1951.「契丹文字解讀の可能性 ―村山七郎氏の論文を読みて―」,『神戸外大論叢』第2巻第4号,40-66頁。

田村實造・小林行雄 1952-53.『慶陵　東モンゴリアにおける遼代帝王陵とその壁畫に關する考古學的調査報告』(上巻本文册、下巻圖版册)京都大學文學部 座右寶刊行会。上巻は1953年、下巻は1952年発行。

小林行雄・山崎忠・長田夏樹 1953.「接尾語として用いられた契丹文字の類別表(1)(2)」,『慶陵　東モンゴリアにおける遼代帝王陵とその壁畫に關する考古學的調査報告』(上巻本文册)田村實造・小林行雄著,京都大學文學部 座右寶刊行会。

清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼 1985.『契丹小字研究』北京：中国社会科学出版社。

長田夏樹 1994.「契丹文字の結んだ縁」,『小林行雄先生追悼録』京都大学文学部考古学研究室編,天山舎発行,96-98頁。『長田夏樹先生追悼集』(長田夏樹先生追悼集刊行会編 2011,264-265頁.好文出版)に収録。

長田夏樹 2001.『長田夏樹論述集(下) 漢字文化圏と比較言語学―中国諸民族の言語・契丹女真碑文釈・民俗言語学試論・邪馬台国の言語―』京都：ナカニシヤ出版。

長田夏樹先生追悼集刊行会(長田礼子 長田俊樹 遠藤光暁 竹越孝 太田斎 橋本貴子)編 2011.『長田夏樹先生追悼集』東京：好文出版。

長田礼子 2011.「長田夏樹年譜」,『長田夏樹先生追悼集』(長田夏樹先生追悼集刊行会編 2011.好文出版),343-360頁。

吉池孝一 2011.「『慶陵』の契丹文字接尾語表について」,『KOTONOHA 百号記念論集』(古代文字資料館)単刊第5,90-107頁。